

## 西條八東先生の思い出

写真は朝日新聞 10 月 19 日「折々のことば」である。今日のことばは「唄を忘れた金糸雀(かなりや)は うしろの山に棄てましょか いえ、いえ、それはなりません」だ。有名な童謡「かなりや」であり、西條八十(やそ)による。

なぜレポートするかというと、西條八十の息子・西條八東先生を語りたいからだ。手元に西條八東著／西條八峯編『父・西條八十の横顔』という本がある。西條八東先生は 2007 年秋に亡くなられたが、残された原稿や資料をもとに編集し、2011 年に出版された。本書に信濃毎日新聞 2000 年 8 月 21 日の「大町市の別荘で」という先生の写真が載っている。懐かしい写真だ。

先生は山ろく清談の最後に、「21 世紀に入っても、大規模な開発は当分なくならないでしょう。だから、過去のさまざまなデータの蓄積が、次の開発の際の大きな参考になります。膨大な量の資料でも、今は CD-ROM に記憶させておけば保管場所もとりませんから、そう大変なことではないはず。そのデータをだれもが利用できるにすれば、日本の豊かな自然環境保護に大きな効果を上げるでしょう。」

西條八東先生は写真のように、じつに温かな感じであり、多くの人から慕われた。その一方で長良川河口堰をはじめ、自然環境の破壊に対して、科学者として厳しく立ち向かわれた。2007 年 11 月 15 日に「西條八東先生を偲ぶ」というレポートを書いた。

2001 年 2 月 4 日に先生直筆の手紙をいただいた。じつは前日の朝日新聞「声」欄に私の投書が掲載され、すぐに丁寧な手紙を送って下さった。すぐさまの「反応」に感激したものだ。

愛知県は中部国際空港の埋立用として計画を進めていた幡豆町の土砂採取を断念した。それにあわせて、「厳しい財政事情が続くなかで、『前島』開発も傷が浅いうちに大胆に見直すべきでないか」と主張した。この投書に対して、先生は「私が感じていたことを、それ以上に具体的な数字をあげてお書きいただき、本当にうれしく、ありがたく感じました」「環境問題で科学的な発言をしていくためには、自然科学系と人文科学系の両面が必要なことを痛感しております」と書いておられる。今に伝えたいことばだ。

(2015 年 10 月 23 日)

